田舎賢人

第42回

自然は資源、人は価値。
幸せの風は「地方」から

西川芳昭さん

龍谷大学経済学部教授

食の安心安全をめぐる議論の中で話題になることが増えた作物のタネ。今もSNSを中心にくすぶり続けるタネに関する論争の真偽を、種子研究の第一人者が一刀両断！

にしかわ・よしあき　1960年奈良県生まれ。京都大学農学部農林生物学科卒。英国バーミンガム大学大学院生物学研究科、公共政策研究科修了。博士（農学・国際環境経済論）。専門は農村開発・農業生物多様性管理。国内外のフィールドで農家の種子調達や品種管理の調査研究を行なう。

コロナ禍以降、ライフスタイルを見直す機運が高まっている。象徴的な現象が、タネまく人々の増加だ。移住先で借りた広い畑で、あるいはテレワークのおうち時間を活かし、ベランダにプランターを置くところから。園芸愛好家の増加は、種苗会社やホームセンターのここ1～2年の業績報告からも明らかだ。

タネそのものの、あるいはタネの周囲で起こっている社会的な動きにも関心が高まるが、ネット上では論理の飛躍した意見や非科学的な情報も飛び交う。私たちは、タネをめぐる情報とどう向きあえばよいのだろう。

――そもそもタネとは人間にとってどんな存在なのでしょう。

「食べられる野生植物の中でも利用効率がよいものをピックアップし、集約的に管理するようになったのが1万年ほど前といわれます。たとえば野生のイネやムギの仲間は、熟した穂からばらばらと落ちていきます。穀類や豆はタネそのものが加食部です。味や栄養価は魅力的でも、収穫や運搬のたびに地面へ落ちてしまっては費用対効果が悪い。